

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32683

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830090

研究課題名(和文) 幼児期における他者からの評価に対する情動的反応：認知発達と養育環境の影響の検討

研究課題名(英文) Young children's sensitivity to criticism: The effects of cognitive development and the environment

研究代表者

溝川 藍 (Mizokawa, Ai)

明治学院大学・心理学部・助教

研究者番号：50633492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期における他者からの評価の受け止め方について、認知発達及び養育環境の観点から検討した。2つの研究を通じて、批判的な評価を前向きな意欲の維持や挑戦的取り組みに結びつける力の年齢差・個人差を明らかにすることを目指した。研究1では、年中児・年長児を対象に調査を実施し、批判的評価に対する情動的反応、他者の心的状態の理解、及び目標志向性の年齢差を明らかにした。研究2では、年中児・年長児とその母親を対象に調査を実施し、母親の子どもに対する情動表出のあり方と、子どもの批判的評価に対する反応の個人差について検討し、両者の関連を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study investigated sensitivity to teacher criticism among Japanese 5- and 6-year-olds from the perspective of cognitive development and the environment. The findings of two experiments revealed: (1) age differences in children's sensitivity to criticism, theory of mind, and goal orientation, and (2) relationships between maternal emotional expressivity and children's response to teacher criticism.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード：批判的評価 心の理論 養育環境 情動表出 発達観 目標志向性 幼児期

### 1. 研究開始当初の背景

失敗場面での情動的反応には、ポジティブ情動を維持し次は上手くいくと考える「熟達志向型」と、ネガティブ情動を感じネガティブな自己認知を持つ「無力型」がある(e.g. Diener & Dweck, 1978, 1980; Dweck & Leggett, 1988)。かつては、これらの思考の個人差は、児童期の9~10歳頃に現れ、幼児は「無力型」の反応を示さないものと考えられてきた(Stipek, 1983)。しかし、1990年代以降の研究からは、失敗が明白であるときには(例、他者から失敗を指摘される場面)、幼児においても「無力型」の反応が見られることが示されている(e.g. Heyman, Cain, & Dweck, 1992; Dweck, 1999)。また、失敗へのフィードバックのタイプによって幼児の反応に違いがあり、個人の資質に関するフィードバックを受けた子どもは、プロセスに関するフィードバックを受けた子どもよりも「無力型」の反応を示すことも明らかになっている(Kamins & Dweck, 1999)。

さらに、教師から受ける批判的な評価を自己の作品評価に結びつける傾向については、心の理解の認知的側面(心の理論)との関連が認められている(Dunn, 1995; Cutting & Dunn, 2002; Lecce, Caputi, & Hughes, 2011)。欧米圏での研究は、他者の心的状態をよく理解する者ほど、教師の発言を「読み込む」ことができるために、教師からの批判に敏感であることを示してきた。例えば、Cutting & Dunn (2002)は、5歳児を対象に個別実験を実施し、教師からの批判的評価に対する反応と、誤信念理解及び感情の理解との関連を検討している。幼児の教師からの批判的評価に対する反応の個人差は、Heyman et al. (1992)をもとに、参加児自身が登場する人形劇形式の課題を用いて調べた。その結果、他者の誤信念と感情を理解している子どもほど、人形劇の中で創作した作品について教師から批判的評価を受けると、ネガティブな自己認知を持ち、その作品を低く評価することが明らかになった。ただし、幼児期の子どもの失敗や批判的評価に対する反応に関して、日本を含む東アジア圏の子どもを扱った研究は希少である。日本の幼稚園・保育所では、子どもは教師から承認のフィードバックを受けることが多い(高崎, 2004)、教師からの批判的評価に対して欧米の子どもと異なる反応を示す可能性があると考えられる。

上記の研究動向を背景に、平成23年度に、日本の幼児の「他者からの評価に対する情動的反応」に関する研究を開始した。平成23年度の研究では、批判的評価をする他者の属性の影響や、心の理論の発達との関連について検討を進めた。ここから、日本の幼児は、異なる他者(教師、友人)から同じ言葉で批判的評価を与えられた際に、他者との関係性を考慮して異なる反応を示すことが示された。さらに、幼児は教師の批判的評価を、単なる現在の状態の否定ではなく、やり直しや

今後の成長・発達への期待として読み取っている可能性が示唆された。

平成24年度~平成25年度に実施した本研究課題は、幼児期における他者からの評価に対する反応の年齢差・個人差を検討するものである。特に、認知的な心の理解の発達と養育環境がどのように批判的評価の受け止めとその後の行動に影響するのかについて発展的に検討した。

### 2. 研究の目的

幼児期における他者からの評価の受け止め方について、認知発達及び養育環境の観点から検討し、批判的な評価を前向きな意欲の維持や挑戦的取り組みに結びつける力の年齢差・個人差を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

幼児の「他者からの評価に対する情動的反応(情動、作品評価、挑戦性)」の年齢差・個人差について検討するため、2つの研究(1, 2)を実施した。年齢差を検討するため、平成23年度の研究で対象としていた年長児に加えて、年中児を対象とした。個人差の要因としては、認知発達(他者の心的状態の理解)と養育環境(母親の「能力・個性に関する発達観」、「子どもに対する情動表出スタイル」)を扱った。

平成24年度は、研究1を実施した。

研究1では、幼児(年中児・年長児)を対象に「他者からの評価課題(Cutting & Dunn, 2002及びHeyman et al., 1992の修正版)」、「心の理論課題(Harris, Johnson, Hutton, Andrews, & Cooke, 1989; Sullivan, Zaitchik, & Tager-Flusberg, 1994)」、「目標志向性に関するインタビュー(高崎, 2004)」を実施した。実験とインタビューは、保育所の一室において個別に行った。

「他者からの評価課題」では、インタラクティブな人形劇を通して「主人公が創作活動において小さな失敗をした際に、教師役の人形がその失敗について批判的評価する場面(批判場面)」を含む課題を提示した。心理的な葛藤状況での反応を調べるため、批判場面は、主人公が自分の作品の出来に満足しており、教師との間でその評価に食い違いが生じている状況となっていた。参加児自身の情動的反応について調べるため、人形劇の主人公には参加児の名前をつけ、参加児自身を投影させた。課題のシナリオは、失敗後に教師からの評価が与えられない「失敗条件」と、教師が失敗を指摘する「批判条件」の2条件で、各シナリオの提示後に、主人公の「情動(喜びを感じるか、悲しみを感じるか、怒りを感じるか)」、「作品評価(作品を上手だと思うか、上手でないと思うか)」、「挑戦性(一度小さな失敗をした創作活動に再挑戦するか)」について質問を行った。課題の最後には、参加児に嫌な気持ちを残さないために、

教師が主人公にポジティブな評価を与え、批判について謝罪し、登場人物全員が楽しい気持ちになる場面を提示した。

「心の理論課題」では、人形劇による一次の誤信念課題を2題(Harris et al., 1989)、紙芝居による二次の誤信念課題を2題(Sullivan et al., 1994)実施した。

高崎(2004)を参考に実施したインタビュー調査では、保育所での生活について話をする中で、「上手にできてほめられるとき(パフォーマンスゴール)と一生懸命練習してはじめてできたとき(ラーニングゴール)ではどちらが嬉しいか」について尋ね、幼児の目標志向性を測定した。

年中児と年長児の課題における反応を比較することにより、創作活動での小さな失敗を他者から指摘される場面における幼児の情動的反応、目標志向性、及び他者の心の理解の年齢差について検討した。

平成25年度は、研究2を実施した。

研究2では、養育環境が幼児期における他者からの批判的評価に対する情動的反応に及ぼす影響について検討を行った。幼児(年中児・年長児)を対象に、研究1と同様の「他者からの評価課題」を、保育所の一室で個別に実施した。また母親を対象に「発達観」「子どもに対する情動表出のあり方」に関する質問紙調査を行った。質問紙は保育所を通じて配布・回収した。

母親の発達観については、Dweck(1999)の知能観尺度をもとに新たに8項目からなる「能力・個性に関する発達観尺度(能力の発達に関する項目4項目、個性の発達に関する項目4項目)」を作成し、子ども一般の発達に関する信念を測定した。

情動表出スタイルについては、Halberstadt, Cassidy, Stifter, Parke, & Fox(1995)の家族内における情動表出スタイル尺度をもとに24項目からなる尺度を作成し、「子どもに向けて普段どの程度ポジティブな情動を表現しているか、ネガティブな情動を表現しているか」を調べた。

#### 4. 研究成果

研究1の結果から、年長児の方が年中児よりも、他者の心的状態を理解していること、ラーニングゴール志向を持つこと、批判場面において失敗した課題に再挑戦したいと判断することが示された。先述のように、欧米圏での研究からは、他者の心的状態を理解する者ほど教師からの批判を受けた後に自己の作品評価が下がることが示されており、この結果は、これまで他者の心を理解することで生じる負の側面として紹介されてきた(e.g., Hughes & Leekam, 2004)。しかしながら、本研究の結果は、他者の心的状態を読み取る能力は、批判的評価の受け止める際に必ずしもネガティブに働くわけではなく、少なくとも日本の子どもにおいては挑戦の意欲につながる可能性があることを示唆する

ものであった。

研究2では、母親の子どもに対する情動表出のあり方と、子どもの他者(教師)からの批判的評価に対する反応との間に関連が認められた。具体的には、子どもに向けて普段ネガティブ情動を強く表出していると回答した母親の子どもは、教師から批判的評価を受けた際に、自己評価を高く保つ一方で、再挑戦の意欲が低いことが明らかになった。この結果から、日常的に母親のネガティブ情動にさらされている子どもは、批判的評価を受けた際に、自己防衛的に自己評価を保ち、さらなる批判を回避するために再挑戦を避ける可能性が示唆された。

さらに、母親の発達観と、子どもに対する情動表出のあり方の間にも関連が認められ、子どもの能力は子ども自身の力で発達すると考える母親ほど、子どもに対してよりポジティブ情動を表出し、ネガティブ情動を表出しないことが示された。

先行研究からは、物事の捉え方・考え方の個人差は、本人の行動のみならず周囲の人々にも作用することが示されている。特に、教師や親が知能に関して固定的なマインドセットを持つ場合、児童期の子どもの成績(Dweck, 1999)や子ども自身の能力認知(Pomerantz & Dong, 2006)に影響することが見出されている。本研究では、幼児を子育て中の母親の発達観と子どもの批判的評価に対する反応の関連についても検討したものの、両者の間に有意な関連は認められなかった。

他者から批判的な評価や叱責を受けた際の情動的反応の個人差は、彼らの認知発達(批判的評価や叱責を与える他者の心的状態の理解)及び養育環境の中で得てきた情動的な体験を基盤に発達していく。他者の心の理解だけでなく子ども本人の情動体験は、コミュニケーションの発達に大きな影響を及ぼす。情動表出、情動理解、情動制御ストラテジーの個人差(e.g. Cole, Dennis, Smith Simon, & Cohen, 2009)に関しては多くの検討が積み重ねられてきたのに対し、子ども本人が体験する情動的側面に関する発達心理学的知見は乏しい。他者からの評価への情動的反応の年齢差・個人差に着目して、その発達の様相を描き出した点は、本研究の大きな成果であると言える。

また、失敗後の再挑戦の意欲や、大人の意見・コメントを次の行動に結びつけていこうとする態度には、文化差があることが指摘されている(Iyenger & Lepper, 1999)。研究1からも、日本の子どもの批判的評価の受け止め方が、欧米の子どもと異なる可能性が示唆された。今後の研究においては、日本と欧米の子どもを対象とした研究を実施し、批判的評価に対する反応の文化差について検討していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

Hughes, C., Devine, R.T., Ensor, R., Koyasu, M., Mizokawa, A., & Lecce, S. (2014). Lost in translation? Comparing British, Japanese and Italian children's theory-of-mind performance. *Child Development Research*, 2014, 1-10.

Mizokawa, A. & Koyasu, M. (2013). Young children's moral judgments about pretend crying: Associations with mental-state understanding. *Psychologia*, 56, 223-236.

Mizokawa, A. (2013). Relationships between maternal emotional expressiveness and children's sensitivity to teacher criticism. *Frontiers in Psychology*. 4:807, 1-7.  
溝川 藍 (2013, 7月号). 「心の理論」と感情理解 子どものコミュニケーションを支える心の発達. 季刊発達 135 (特集) いま、あらためて『心の理論』を学ぶ. ミネルヴァ書房. Pp.48-53.

〔学会発表〕(計5件)

溝川 藍. (2014). 幼児期における教師からの評価に対する反応と母親の情動表出スタイルの関連. 日本発達心理学会第25回大会発表論文集, 322. (2014年3月21日, 京都大学)

溝川 藍. (2013). 幼児期における批判的評価に対する反応と心の理論. 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1038. (2013年9月20日, 北海道医療大学, 札幌コンベンションセンター)

Mizokawa, A. (2013). Theory of mind, confidence in school activities, and sensitivity to teacher and peer criticism in Japanese children. Paper presented at the 16th European Conference on Developmental Psychology, Lausanne, Switzerland. (3rd - 7th, September) (発表日: 2013年9月5日)

Mizokawa, A. (2013). Japanese children's sensitivity to teacher vs. peer criticism. Paper presented at the 15th Biennial Conference of the European Association for Research in Learning and Instruction (EARLI), Munich, Germany. (27th-31th, August) (発表日: 2013年8月27日)

溝川 藍. (2012). 幼児期における他者からの批判的評価に対する反応 - 批判者の属性の影響. 日本心理学会第76回大会発表論文集, 923. (2012年9月12日, 専修大学)

〔図書〕(計1件)

溝川 藍. (2013). 幼児期・児童期の感情表出の調整と他者の心の理解. ナカニシヤ出版. (2013年2月20日, 総205ページ) ISBN978-4-7795-0689-5

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

( )

研究者番号:

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: